

田村 紀雄著

# 海外の日本語メディア

変わりゆく日本町と日系人

本書は長い間、海外における日本語新聞の研究を続けてきた著者の最新作である。海外の日本語メディアを扱うことは、副題「変わりゆく日本町と日系人」が示すとおり、メディア発行者のみならず海外に居住する日本人の軌跡をたどることでもある。同時に別の意味合いで、移民史や外交史、コミュニケーションの形成過程と変遷、マイノリティの問題などは避けておれない。包括すれば社会と文化、メディアの関係を深く掘り下げる題材としては最良のひとつであろう。

この多様な領域を網羅することはまさに学際的な研究であり、世界のグローバル化が始まったという現在の一般認識とは異なり、本書の対象紙だけでも十九世紀半ばまで遡ることが必要である。さらにはアメリカ建国以後の世界的な民族の移動、国家の建設、メディアの発達などを含めての広範なメディア史を理解する必要が読者には求められるだろう。

とは言つもの、副題からも分かるように、そうした難しい研究書の筋をたどらず、日系人の発展史的読み物としても十分に通用することが本書の強みともいえる。例えば、日本人とは何か、日本人はいかにして日系人になるのか、日本語はどうなるのかなどに関心ある方には、メディアというコミュニケーション媒体をとおして読み解く面白さがあるだろう。

## ◇ 多様な領域を網羅 ◇

日系人の発展史的読み物としても通用

鈴木 雄 雅

言葉は著者は使っていないが、の母国情報は日本語

新聞から日本語放送、国際映像やインターネットの時代になりつつあるもの、現地で発行される日本語新聞の意味は何かを問うと同時に、著者が「日本語ジャーナリスト」にこだわっている点は興味深い。最近はどうしたエスニックメディアの研究に関心をいだく留学生が少なくなっている。ただそれは量的に日本へ留学する者が増え、国内における母国語メディアに接することが彼らにとって必要不可欠であるという認識の芽生えでもある。他方、一般的に一過性のこころ、奥の深さがないころは気にもなる。

そのことは本書のようなアカデミックな視点を持ち、「移民研究」「地域研究」「メディア研究」など個別分野から融合する過程を経て、長く研究を続ける人が育つかどうか、いわば「研究財」が社会的に蓄積するよう土壌が必要という提言

言いつながら。こうした研究の嚆矢である蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』が刊行されたのは約七十年前。といふことは、ひとりの人間が生命を授けてから世を去るときまでと等しい齢(よわい)で新しい時代を迎え、日本語メディア研究に入ったと解釈すべきか。実は蛭原が創出した研究領域の原点に戻ったのだろうか。

評者自身、蛭原が記したもう一冊の『日本欧字新聞雑誌史』(一九三四年)を手がかりに研究を始めた経緯があるせいか、七十年間の空白を埋める作業の困難さは十分に理解しうる。そのうえで、科学と思想の立場、戦後の学問の自由の環境、先端的な研究方法の導入、社会史・思想史研究の継続性を重視した本書は、やはりアカデミックな研究とはどういうものであるかという問いに、十分に答えうるものである。(すずき・新聞学専攻)

★たむら・のりお氏は東京経済大学名誉教授・ジャーナリズム論専攻。現在、日本インタンシップ学会会長。著書に「エスニック・ジャーナリズム」など。(一九三四(昭和9)年生)



A5判・340頁・2940円  
世界思想社  
978-4-7907-1306-7